明治社会主義と幻の詩集

社会主義の詩と詩人とをどのような形でとらえるか、ということの深い詮索はいま私にはさまで必要ではない。極めて大づかみに『社会主義詩集』の児玉花外から『どん底で歌ふ』の根岸正吉、伊藤公敬までの、即ち明治三十六年（一九〇三）ごろから大正九年（一九二〇）ごろまでの、ある一連の詩人たちをそのように定義したい。

日本の社会主義が研究の時代からようやく啓蒙と運動の時期となり、日露戦争に際しての非戦反戦の活動から、やがて大逆事件とともに来た沈滞をくぐって、大正の第一次世界大戦にからむ時期に、わが社会主義詩人たちはそれぞれの立場から活動をひろげた。そしてそれはやがて大正の末から昭和はじめのプロレタリア詩の運動に道をゆずりながらの合流ということになるのである。

もちろん、この間における社会主義の詩は、はじめ文学よりもむしろ社会主義運動そのものであったという面をつよくもっていた。したがってそれは文学の流れとしてはいささかのもの

にすぎなかったが、明治の理想主義やロマン主義、自然主義等のめまぐるしく変転した文学の主張の影響を受けつつも、よりふかくつよく、社会的不平等の民衆生活から、じかに不満を汲み上げる努力を一貫したことによって、詩の流れとして一つの存在となり得たのであった。

社会主義詩人、あるいは社会主義時代の詩人といわれた人々には、概して二つの流れが考えられる。一つは詩集『社会主義の詩』に集められた人々即ち堺枯川、幸徳秋水、西川光次郎、木下尚江、山口孤剣、原霞外ら社会主義運動の推進者たちであり、今一つは児玉花外、大塚甲山、小塚空谷らのように、詩人であって社会主義に同調的であった人々である。やがてその道が社会主義と文学とにさらに別途のものとなっていった。なかには松岡荒村のようにすぐれた詩人であって情熱的な社会主義的詩人の上にあった。

そして社会主義が政治的にも思想的にも新時代的存在であったことに比べて、彼らの詩が新体詩の殆んど七五調に終始したという文学的な古さは、時代的な止むなさとして現在に至ってもそう注目されていないが、そこには文学と政治（あるいは社会運動と文学）の問題が存在していたのである。いわば社会主義の詩はほとんど社会主義のための詩でのみあったのであり、その延長線上に同じ問題を抱えてプロレタリア詩が後続したということになるのであろう。

当時（明治三十年代）の社会主義運動のなかに伝道旅行の形式が用いられたことと同じよう

な意味において、社会主義の詩も亦宣伝啓蒙を目的としたのであるから、運動と詩との当然な関係であったというべきかもしれない。だが後のプロレタリア詩運動につながるまでの社会主義の詩が如何にあったか、どのような詩人がそこで如何に活動したか、について回顧しておきたい。

まず時代的に尖端な社会主義思想を背負いながら、相かわらずの新体詩でしか在り得なかった時代的宿命の下で、彼らが残した詩の業績に評価すべきものがあり得たとすれば、それは社会認識の故か、詩人の反抗的な資質の故か、という問題がある。概観すれば花外のような詩人的資質を社会主義の影響によって歴史的な先駆者たらしめたと思えるもの、荒村のごとく社会主義運動に加わることによってその詩がはげしさを加え批評眼に鋭さを増したと見えるもの、さらに秋水、枯川その他の社会主義者たちのように社会主義運動のための詩の利用を考えたと見えるもの、これらの分類とともに、この時期なりの政治と詩との問題とそのかかわり方を思い深めることをしなければ、プロレタリア詩の時代における政治の文学へのプラスとマイナスは究められないように思われる。

ところで要するに、社会主義の詩は概して新体詩に終始したという現象をもっている。社会主義という前向きの思考が新体詩という新しくはなかった形式によってとらえられ、表現されざるを得なかった得失の現われこそ、社会主義の詩十数年の姿である。しかしまたこうもいえ

るであろう。新体詩としては時代遅れだった彼らの詩がなお歴史的な回想を強い得るのは、その内容とモティーフの社会的先進性の故であるとすれば、現代の文学的な目によって検討を要求する問題がその詩の歴史のなかにあるのではないかと。

『社会主義詩集』の著者として詩史上にある名誉を記憶された児玉花外は詩の上手な詩人ではなかった。とはいっても誦するに足るものがそこに皆無だというのではない。

鬼こそ堪へめ、人なるを
長き苦しき労働に
身は青草の細くのみ
一たび肺を病みしより
血を咯き逐はる杜鵑
彼方此方とさまよひて
今はすみかもあら悲し
血に啼き狂ふばかりなり。

（「失業者の自殺」から）

のように、うたい難い当時の尖端の社会問題を七五調にまとめた努力は評価されねばならないが、「血を咯き逐はる杜鵑、今はすみかもあら悲し」など、このテーマにとって表現が如何にも無理無体だという印象を受ける。定型新体詩の桎梏が折角の社会主義的発想をスポイルしているのである。当時はこのような表現のスタイルを疑わなかったからこれで通ったであろうが、これと同じことが詩集『社会主義の詩』（明治三十九年）にもそのまま現われている。

花外の『社会主義詩集』が詩集発売禁止の第一号になったことには、時の権力者の非文化性の逆な曝露という景物もあるが、つまりそれを社会主義が発売を禁ぜられたものだと見れば、そこに在るものは政治的問題であって、文学ではない。くりかえしになるが社会主義の詩の問題の核心はここにあるといわねばならない。ここから如何に文学的に抜け出て、社会主義の詩が「詩―文学」として進み得たか否かを省みる必要がある。

日露戦争をめぐっての非戦反戦の運動のなかに生れた詩人の一人は大塚甲山だと思う。

甲山ももちろん七五調の詩人である。しかし彼は社会主義のためのみの詩人ではなかった。いいかえれば政治のため詩をかく詩人ではなかった。花外とくらべてもはるかに政治主義的口吻がすくない。むしろ花と鳥をうたい、乱れる胸の思いを述べる詩人でありながら、自由への憧れから社会主義に近づいたのである。テーマとして社会主義は少量だが、残された詩の純度は花外よりも高く、平民新聞（明治37年8月21日）に書いた「車夫」の如きは七五調の詩として

はそのリアリズムと働く者への親近感において抜群であろう。

せめては馬と生れなば、
うたるる鞭はつらくとも、
桶の秣に飽きたりて、
休らふ小夜もあるべきを。

饑に病み臥す妻と子の、
呻きの声に面そむけ、
挫けし足を忍びつつ、
辻のほとりに客を呼ぶ。

唯一銭を値切りつつ、
重き骸を引かするは、
今待合に千金を、
湯水の如く捨し者。

己が敵の身を乗せて、
燃ゆる暑さを走る時、
たばしる汗と涙とに、
道の砂も溶くるらむ。

（軍夫）

この詩とおなじ年の「漁夫の一家」は、二人の子と妻と母の一家を支えていた漁夫に来た「召集状」による一家こぞっての悲歎のうたであった。「籠の鳥」は、捕われて縛められた不自由な境界にあって「我はなほ心のうちに、縛めを受けぬもの持つ」とのうたである。大塚甲山の社会主義詩と花外の詩とを比べるとき、甲山の中に近代的自由の思いがつよく、花外には儒学的教養が社会主義とつながったような趣きが見える。

小塚空谷もこの時代に記憶される詩人であるが、その「革命行」（明治37年、『社会主義』）は「来たれ革命、革命来たれ／正義かがやく政治／革命成就の暁は／理想社会の序幕なり」のようなうたい方で、直情径行な発想のままに七五調を用いたという感がつよい。その点では花外よりいっそう、そこにあるテーマは社会主義を衆人に解くことを目的としており、社会主義運動者たちの詩と殆んど一つである。

「日本プロレタリア文学大系・序」（昭和30年）によれば、社会主義詩人グループとして、花外、空谷、孤剣、尚江、荒村、甲山の他に児玉星人、平木白星、山本露葉、小松未曙、与謝野晶子、同鉄幹、大塚楠緒子、佐藤春夫らが挙げられているが、その多くを私は「社会主義詩人」とは認めることをためらう。晶子、楠緒子、未曙らの戦争不同調の詩、鉄幹、春夫の大逆事件被告大石誠之助に関する詩等は、時代的な先駆性を認めるとしても、社会主義即ち社会生活の不平等を打破せんとする意欲を主とするものではなかった。

明治期の社会主義詩人として語るべきは、花外、甲山、空谷、荒村に、山口孤剣を加え、最後に晩年の啄木を語ることで尽されるのではないか。木下尚江を入れるとなれば社会主義者として詩を書いた秋水、枯川、光次郎、介山、霞外等を当然数えなければなるまい。原霞外の如きは『社会主義の詩』『俗体詩』二つの詩集に名を連ねている。

私は啄木以前に語るべき社会主義詩人は松岡荒村であると思う。彼の「残逆の世に寄する歌」はこのようにうたい出されている。

人の浮世の半面に坐る、
金殿よきけ玉楼は耳をかたむけよ、
大厦高楼は空しく爾の首を垂れよ、

鳴呼爾等残逆の鬼、
酒地に棹し肉林を戯れ、
爾等が放歌乱舞のどよむうらには、
飢に泣き寒に凍へて、
咽泣日夜絶ゆるなき様を知らずや
持てる者は益々これに与へられ、
持たざる者は持てる物をも奪はるるとは、
如何に戦慄のことばならずや、
みよ鬼はますます牙するどく、
弱きはますます肉を食まる
鳴呼残虐の世界暴戻の世や、

『荒村遺稿』の中にはこの他に「飴売之歌」「三つの声」「月けぶる上野の歌」等記憶につよ

い作品があり、評論「国歌としての君が代」の如く反逆的な意図を、「君が代」の国歌不適を論ずることに託したものなど在来の新体詩人とはまるで身構えがちがっている。情熱の詩人としてその才能を知られた荒村は、白柳秀湖が遺稿編集に当って記した「其のうら若き日に——濃美育児院に投じ、——至る所無告の孤児に慟哭し、冷酷氷の如き社会の同情を要求せり、君鉱毒問題を耳にするや憤然として蹶起し、ひとり渡良瀬の河畔に沿ひ、白葦黄茅の中に幾多の窮民が皇天に号哭して、奸吏の非道を怨嗟するの声を聴き、義憤心頭に発し——」の如きヒューマニストから、やがて社会主義運動へと進んだのであった。彼は哀切な新体詩も多く書いたが、「残逆の世に寄する歌」では、社会主義的発想に伴って文語ながら、定形を脱して自由な詩をかくに至っている。これを書いた明治三十七年に死去したが詩想の豊かさはあるいは甲山以上であったかもしれない。死の翌年、編集発行白柳武司、印刷山口義三の名によって、哀惜する友人たちの手で『荒村遺稿』が刊行されたが、『社会主義詩集』につづく第二番目の発禁をくらったため、ひろく知られることなく埋もれ、たとえば『世界現代詩辞典』(昭和二十六年、創元社)なども彼を逸しており、僅かに『プロレタリア文学大系』が序巻に拾い上げたくらいである。数年ほど前にその『遺稿』の復刊が出来てようやく私なども手にすることができたが『大塚甲山遺稿集』が戦後の昭和三十二年に出たことと併せて、社会主義詩人の処遇が斯くの如き不幸なものであることを記憶せねばなるまい。

明治三十六、七年ごろ「労働軍歌」「革命行」等をかいた小塚空谷、「遊君」「工女」を書いた児玉星人について、それらの詩が雑誌『社会主義』に発表されたという以外のことを現在なお私はキャッチし得ていない。おそらく、二人とも個人詩集を編むまでには至らなかったのであろう。ともに新体詩人であるが、テーマとモティーフに於て時代の先駆者であったことは作品の語るところである。

明治期の社会主義詩人の詩のおしなべての特徴は、戦争にたいする反抗的な気構えである。それはわが国の社会主義運動が日露戦争を契機としてひろく大きく表面化したこととかかわるが、現実の問題として戦争がわが国民の生活に衝撃的であったからであり、晶子の「君死にたまふことなかれ」や楠緒子の「お百度詣で」などが社会主義の意識からではなしに生まれたのもそのためである。またもう一つ、これら一群の詩人の特徴は下層階級者の生活困窮をテーマとする詩を生み出したということである。

これらの詩的活動は明治三十六年の『社会主義詩集』、同三十八年の『荒村遺稿』、同三十九年の『社会主義の詩』『俗体詩』、となったが、何れも発禁となって埋もれた。

花外の『社会主義詩集』などは、中味は大したことはない、題名の社会主義がいけなかったのだ、というようにいわれ勝ちだが、ほんとうにそうだろうか。殊にプロレタリア詩の時代をはるかに経た、太平洋戦争後の自由のムードに慣れた感覚からすれば、明治三十年代の花外の

詩は鋭角的とはいいがたいかもしれない。だが、相ついで社会主義が弾圧され、いくつかの詩集が禁止された情勢の下では、詩作の情熱はつよい抵抗感に支えられねばならなかった。そのしかかる権力の下では、『社会主義詩集』『荒村遺稿』が、ともに反抗的異端の書としての内容をもっていたのである。つづいてアンソロジー『社会主義の詩』は、これはまた詩の内容、筆者の顔ぶれから見て、文学としてよりも平民社の反戦活動にそのままつづく反国家的運動の一端と見ての弾圧であったであろう。その中の木下尚江のざれ歌「ポンポコ歌」は

華族の妾の頭に光るわ何ですえ。
ダイヤモンド？
否え　否え　違ひます。
可愛い百姓の油汗！
ポコ　ポンポコポンポコ　ポン。

であり、また某氏作として収められている「血染の赤旗」はこううたう。

白腕富有を誇る、

暴漫無為の徒等
政権　彼に在り、
苟安　惰民　我を責む。
何ぞ恐れん、我に
「多数」の剣あり。
労働　正義　の手、
団結して　いざ立たん。

見よや血染の旗を、
そわ何？　社会主義！
圧制不義の下、
倶に手を取りて立つ。

わが国の支配者がかかる歌を好まなかったのは彼らなりの当然であっただろう。花外の『社会主義詩集』は、さすがに『社会主義の詩』よりも文学においてすぐれていた。ひとしく社会主義をうたったものとしても花外以下の詩人たちのものはその文学的表現力による浸透性が禁

止の理由であり、『社会主義の詩』に見られる当時の活動家や思想家のものは、はげしく気短かな直接的反抗性が禁止の理由となったのであろうと私は理解する。

このことは、夭折した松岡荒村以外の詩人たちのその後の活動が多く社会主義から離れ、社会主義活動者がその時期以後は詩作から遠ざかって見えたところにも、かかる詩性のちがいが考えられ得るというものである。

明治四十三年（一九一〇）に起った大逆事件は、しばらくわが国の社会主義運動の一切を禁断した。わが社会主義詩人たちの詩もほとんど窒息したといわざるを得なかった。

そのとき、ただひとり研究し潜行して、より社会主義に近づいた詩人は石川啄木であった。啄木の晩年の詩は流れとしてたしかに明治三十年代の社会主義の詩を継ぐものであったが、それは花外、甲山につづく社会主義の詩としてばかりでなく、雑ぱくではあったが革命実行の情熱に燃えた社会主義者たちの詩も亦彼によって継承されるものがあった。もし求むるならば、彼の先駆者としての松岡荒村にやや同質の詩人的情熱が見られたということができるだろう。

石川啄木は大逆事件の事実を調べ、そのフレームアップの真実に迫った唯一人の文学者であった。啄木は明治文学者の誰よりも、その時代の社会主義運動の実際にくわしく、また社会主義運動を弾圧する支配階級側の実態についても彼なりの洞察をもっていたと推察される。大逆

事件への究明の上に立って彼の晩年の社会的な論文はかかれている。その時代の誰よりも啄木が後のプロレタリア文学の先駆者となり得たのはそのためである。

明治三十年代の社会主義者やその詩人たちに比べて明治四十三、四年ごろの啄木はファナチックではなかった。大逆事件が巨大な挫折であったように、彼の中にあるものはその事件を知ることで一たび挫折し、ふたたび起ちあがらんとする意欲に駆られた。『呼子と口笛』の詩群のなかのニヒリズムはそのような、啄木の体験的な挫折と反逆心のからみあいにかかわって発している。決して生活の場からうたったものでもなく、だからといって社会主義を謳歌するのみではなかったことの、そのよって来たるところを私はそう理解する。それによってはじめて、社会主義詩以上のものが啄木によって生み出されたのである。

「はてしなき議論の後」「ココアのひと匙」「激論」「墓碑銘」などを、これはおそらく明治期のもっとも美しくはげしい詩として私はくりかえし読んできた。その詩句の力づよさは、まず文語調であること、自由詩型であること、この二つの特長が啄木の口吻をこの上なく切迫的な詩に生かして成功させている。ここには社会主義の詩との時間的距離感をとおり越した親近感がある。それはその中味にもよるだろうが、いっそう自由詩型と、ある歯切れのよさをもった文語調とのこの組合わせがそれを生み出している。いわば啄木の詩人的才能ということであろうが、本来新体詩人の啄木が、この形式をとったところに、社会主義圧迫にたいする憤懣

と反逆的精神の奔出があり、七五調定形から必然的に彼を脱出させたのだと思われる。

われは知る、テロリストの
かなしき心を——
言葉とおこなひとを分ちがたき
ただひとつの心を、
奪はれたる言葉のかはりに
おこなひをもて語らんとする心を、
われとわがからだを敵に擲げつくる心を——
しかして、そは真面目にして熱心なる人の常に有つかなしみなり
はてしなき議論の後の
冷めたるココアのひと匙を啜りて、
そのうすにがき舌触りに、
われは知る、テロリストの
かなしき、かなしき心を。

ここに私が、啄木の有名な「ココアのひと匙」をわざわざ引用したのは、啄木のこの詩のなかに、明治社会主義時代の多くの詩をこえるものが見出されると思うからである。社会主義は人間の個の問題をあまり重要視したとはいえなかった。この詩のいわんとするところは、反逆の思いと、そして「個」の意識である。この一線上のはるか彼方、曲折を経ながら、大正末期の、第一次世界戦争を挟んだ後の、主観性の強烈な前衛詩の潮流につづこうとするものが仄見える。

社会主義の詩とプロレタリア詩とがつながるためには、その中間に啄木の『呼子と口笛』の詩がどうしても必要だったのである。しかし啄木というインテリゲンチャの、反逆の思いと自己にこだわるニヒリスティクな情感だけではまだ大きく不足するものがある。それは何か。私はそこに詩集『どん底で歌ふ』の二人の詩人の出現の意味とその必然性とを思うのである。

啄木は「はたらけど、はたらけど」とうたいはしたが彼のそのときの思いは、それは彼の才能をもってすれば、いつかはその境界から脱出できるものであるという思いによってうたっていた。労働者の階級的実感とそれはちがう。それは近代の工場の中の労働者、労働力を搾取されていることを実感し得る労働者の出現とその自覚にまたねばならなかった。

啄木の死以後、大正に入ってその労働者詩人が現われた。大正九年に『どん底で歌ふ』を出した二人の詩人根岸正吉と伊藤公敬である。

さて、明治三十年代に出現した社会主義詩人と彼らの発禁になった詩集は、花外の『社会主義詩集』堺利彦編の『社会主義の詩』、つづいて『俗体詩』、松岡荒村の『荒村遺稿』に至るまで、幻の詩集といわれるにふさわしく、見ることも手にとることも絶望的であった。『社会主義詩集』は完本未だに発見されずとされている。『社会主義の詩』は刊行の事実までが疑われたりした。発禁処分の後世に与えた深い爪跡であった。

二つの発禁詩集をもつ児玉花外

発禁詩集といえば、すぐ児玉花外と『社会主義詩集』を思い出す。この詩集について語ることはあまりに多い。この詩集が出るまでの花外の明治社会主義への同調。そして一千部の印刷本が刻版もろとも没収されたこと、現在まで確実な原本はまだ発見されていないといわれること等を含めて、『社会主義詩集』は明治の社会主義運動にかかわり、詩集発禁の第一号としてつよい印象を残すものとなった。この詩集の発禁の翌年に『花外詩集』を出したが、それに付加された『社会主義詩集』発禁への五十九氏の同情録のことまで、話題に富んだ花外とその詩集である。この二つの詩集はともに大阪の金尾文淵堂の発行であった。

花外が発禁詩集第一号の厄に遭ったのは明治三十六年八月、それは半世紀をはるかに越える

昔のことでありながら、この詩集はなお今日の詩の話題とともにある。

この本が日本評論社から復刻されたのは昭和二十四年十一月であった。この復刻本が完全であるか否かについて多少の異論を投げる人がないでもないが、私は、明治のある日本を否定するかのように現われ、弾圧に消えたこの詩集（復刻版）を手にして、感動した。

「児玉花外の、これが社会主義詩集か」とそれをひらいて次々と読みいそいだ。「労働軍歌」「大塩中斎――」「紡績工女」「失業者の自殺」等々。そしてそのなかに古びた七五調の新体詩を見た者も、社会主義的な反抗を受けとった者もいたであろう。また、これこそと明治のロマン主義の息吹きをなつかしむ思いもあっただろう。

そのいずれも正しい。しかしこのなかから近代社会への明治の進歩とともに来た日本社会主義の揺籃期に、花外が叫んだ反権力と自由の精神を読みとらねばならぬとおもった。

花外は社会主義者として中途半端だったかもしれない。しかし彼は挫折者ではなかった。彼が大正、昭和と移りゆく時代のもとに示したナショナリズムは、昭和の左翼におこった転向とはちがって、彼自身の内奥からのこえであったものである。この間に変化したのは日本の社会主義と日本の国家主義であり、また日本の近代詩であって、もっとも変らなかったのが花外と花外の詩であった、のではないか。

花外の抒情と明治社会主義はともにヒューマニズムと非戦運動への感動の中にあり、だから

花外は社会主義と、労働軍歌を歌い大塩中斎を即吟し得たのである。時代の曙の若さのなかにいたのである。

昨夜（ゆうべ）より降りし春雨に
花に貧しきわが庭の
梅の蕾のほころびぬ
み空の星の宿るごと

窓にもたれて眺むにも
思うに我世、人みなの
心の花の開かずば
何か楽しき、春雨よ。

（春雨）

これは春雨をうたったのではなく、春雨からの連想によって人の世についての感慨をうたっている。このような春雨のうたも、次の「壁一重」という詩も、花外の内部における一つの憂きものであったにちがいない。

雪また雨か白露の
悲々惨々の人生(ひとのみ)や
得意失意の夢の道
辿る浮世の切通(きりどおし)
上り下るや坂の人

坂に連なる岩崎家
黄金の日には銀の月
帝都の中に城郭(しろ)のごと
春は柳に夏は蓮
照るや不忍池の畔

同じみ空の下に生き
内に世の苦を知らず顔
華族平民壁一重
外には家なき立(たち)ン坊が

凍えを雪に顫ふなり。

（壁一重）

働く人の貧しさとその死を悼むこの感情と国を憂うる思いとは花外においてその発顕の根は一つである。彼は「社会主義演説開会の歌」や「労働者懇親会の歌」もかいた。大正十二年には有名な明治大学の校歌をかき、昭和十六年には『憂国詩集』を出した。社会主義とナショナリズムに一貫する情熱をもちつづけたことこそ、児玉花外の詩人たる所以と見なければならない。これが亦明治三十年代のわが社会主義でもあったのである。社会主義も詩も揺籃期というべきであろうか。

児玉花外においては『社会主義詩集』の発禁のことがひろく知られて、その第四番目の詩集『天風魔帆』がまたも発禁の憂き目を見たことについては、あまり語られることがなかった。つづけざまの打撃にはもうあまり注意を払わない、初モノ好きのジャーナリズムなどといってすまして通りすぎられる問題ではない。

花外に、彼の第一番目の詩集発禁が与えた打撃は、その生涯の運命にまで及んだと一般に見られているが、第二回目の発禁の追討ちがそれをさらに拡大強化するものであったのは、いまさら指摘するまでもないこと、花外ほど検閲制度に痛めつけられた詩人は空前、もちろん絶後であろう。

彼は『社会主義詩集』が発禁となった後も、雑誌「社会主義」などに詩の発表をつづけたが、その翌明治三十七年、同じ大阪の金尾文淵堂から『花外詩集』を出版。その末尾には有名な五十九氏の「同情録」が付録となっていた。『社会主義詩集』の発禁処分に同情した人びとが、花外をはげまし、慰め、あるいは処分の不当を述べる文章を贈ったもので、今は戦後に復刻された『社会主義詩集』にも収録されている。

主なる人として、岩野泡鳴、幸徳秋水、西川光次郎、徳田秋声、鳥居素川、小栗風葉、河井酔茗、中村春雨、松崎天民、小塚空谷、安部磯雄、木下尚江、堺枯川、平木白星、高須梅溪、後藤宙外、大町桂月等々の名があった。花外はこの年上京して、翌明治三十八年にはわが国はじめての社会主義文芸雑誌『花鞭』の発行人となり、明治三十九年には詩集『ゆく雲』を刊行した。

そして三十九年の「十二月二八日印刷、同四〇年一月一日発行」として世に出た彼の第四番目の詩集『天風魔帆』が、花外にとって二度目の発禁という不運に遭遇したのである。この詩集の中の「本能寺の跡に立ちて」「可憐児」「天露」「越中島の朝」(「失業者の自殺」改題)「鳥屋の娘」「新聞幼工の歌」「大塩中斎先生の霊に告ぐる歌」の七篇は、『社会主義詩集』の作品がそのまま移されたものであった。『社会主義詩集』は印刷所から刻板原稿とその他の一切を根こそぎ押収された、という稀な処置であり、それにたいする精いっぱいの反抗とし

て、「大塩中斎――」をはじめとする、おだやかではあるがヒューマンな数篇を、彼はどうしても紹介せずにはいられなかったのであろう。

そのことが彼の意図に反して再び発禁の理由となったのか、新しく書かれたその後の詩が忌諱にふれたのか、すでにそれは遠く、判明しがたいが、私たちはこの『天風魔帆』が、『社会主義詩集』のもつ詩心から後退していないことを知るのみである。

詩人花外は、性来、自然の風物の推移に感じやすい人で、そのおもかげを至るところに散見する。自然のうつりかわりに感動し、社会の不平等についてはそれを権力人為のものとして許さざるところに、花外の明治社会主義的ヒューマニズムとその情熱があった。

明治の日本は、相次ぐ発禁の措置で、花外を落魄の境地に追いやることは出来たが、ひとたび発した詩心は現在にもなお生きて、あるいは発禁詩集として発掘、または復刻されて、六十年の後に彼の情熱は、流寓のはてに死んだ詩人を超えて右往し左往する。

「秋思」(遙に大塩先生の墓に)という詩の、終りの一節を紹介しよう。

ああ、山青く、野は広し、
いづこか骨の捨てどころ
我も小さき墓となり、

日本の国にただ二つ
君が後（しり）へに唄われむ

と、かくはるかに花外は、奇しくもうたっていたのである。

幻の詩集『社会主義の詩』